

第5回 時計台対話集会

森里海のつながりを 生物多様性から考える

日時

9月28日(日) 13:30-17:00

会場

京都大学百周年時計台記念館
百周年記念ホール

会場までのアクセス(駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。)

- 京都駅(JR・近鉄)から 市バス「京都駅前」より
206系統「東山通 北大路バスターミナル」行 約40分
「京大正門前」下車
- 阪急河原町駅から 市バス「四條河原町1」より
201系統「祇園 百万遍」行 約30分
「京大正門前」下車
- 京阪をご利用の場合
京阪「出町柳」駅下車 東へ徒歩約15分
- 17系統「河原町通 錦林車庫」行 約40分
「百万遍」下車
- 31系統「熊野・岩倉」行 約30分
「京大正門前」下車

同時開催パネル展 フィールド研・生態研の施設と活動紹介
(12:00 から 2階国際ホール I にて)

後援 ▶  日本財団、京都府教育委員会、京都市教育委員会

協賛 ▶  村田製作所、 ANA 全日本空輸株式会社、 Eco-Log Cafe NPO 法人エコロジーカフェ、サイファーアソシエーツ株式会社

ごあいさつ

京都大学において、今後の地球環境問題に関する教育と研究を担う3本の柱を構築することが企画され、生態学研究センター・地球環境学堂について、平成15年4月1日に設置されたのがフィールド科学教育研究センターです。その使命は、フィールドに根ざした学問の推進と教育の実践であり、研究の柱として水を中心とした自然と人との繋がり科学である「森里海連環学」を掲げています。

本センターではこれまで毎年、研究成果の社会への還元を目的として、「森里海連環学」についてキーワードにした時計台対話集会を開催してきました。例年500名近い市民の皆様には時計台記念ホールにご参集いただき、さまざまな話題をフィールド研のスタッフと一緒に考えていただきました。本年5月、国会で生物多様性基本法が成立し、これからの循環型社会の構築には、「生物多様性」がすべての人間活動における重要なキーワードとなることが予想されます。そこで第5回の時計台対話集会では、「森里海連環学」を「生物多様性」という観点からあらためて捉え直すため、「生物多様性」に関して非常に多くの活発な研究活動を行っている京大大学生態学研究センターとの共催で開くことにいたしました。

京大大学生態学研究センターは、京大における伝統ある学術潮流の一つである生態学の総合的基礎研究を目指す研究機関として、平成3年に全国共同利用施設として設置されたものです。当時からわき起こってきた地球環境問題や生物多様性問題が、この設立の背景にありました。平成13年4月には、「生物多様性および生態系の機能解明と保全理論」を研究目標として掲げ、全国共同利用施設として第2期生態学研究センターが発足し、今日に至っています。

今回は、両部局の研究テーマ、すなわちフィールド科学教育研究センターの「森里海連環学」と生態学研究センターの「生物多様性科学」のコラボレーションです。これまでの対話集会とはひと味違う、やや噛みこたえのある構成となっています。今回の集会のテーマ「森里海のつながりを生物多様性から考える」が環境問題に対する理解を深め、ひいてはこれからの社会構築を考える上での重要な視点を提供させていただくことができれば、と期待しております。

京都大学フィールド科学教育研究センター長
白山 義久
京大大学生態学研究センター長
高林 純示

講師略歴



只木 良也(ただき よしや)

名古屋大学名誉教授

1933年京都市生まれ。京都大学農学研究科林学専攻修了、農学博士。農林省林業試験場研究室長、信州大学理学部教授、名古屋大学農学部教授、ブレック研究所生態研究センター長を経て、現在、国民森林会議会長。昭和61年日本農学会賞受賞。著書に「森の文化史」「ことわざの生態学」「森と人間の文化史」「森林はなぜ必要か」「森林環境科学」「森—そのしくみとはたらき」「ヒトと森林—森林の環境調節作用」などがある。



向井 宏(むかい ひろし)

北海道大学名誉教授

1944年香川県生まれ。広島大学理学研究科生物学専攻修了、理学博士。東京大学海洋研究所、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション教授・厚岸臨海実験所長を経て、現在、NPO法人北の海の動物センター理事、海の生き物を守る会代表。元日本ベントス学会会長。2004年には京都大学フィールド科学教育研究センターと共同で、「北海道大学・京都大学合同実習—森里海連環学—」を創設。著書に「海図のみ方—海の自然を探る」「海底境界層における窒素循環の解析手法とその実際」などがある。



益田 玲爾(ますだ れいじ)

京都大学フィールド科学教育研究センター
准教授

1965年横浜生まれ。静岡大学理学部卒業、東京大学博士課程修了。スコットランドに2年間留学、ハワイの海洋研究所で2年間勤めたのち、00年4月から京都大学舞鶴水産実験所に勤務。魚の行動や生態についての疑問を実験と観察から解決する「魚類心理学」が専門。著書に「魚の心をさぐる」(成山堂)がある。



吉岡 崇仁(よしおか たかひと)

京都大学フィールド科学教育研究センター
教授

1955年大阪市生まれ。07年より現職。専門は生物地球化学。森林集水域における物質循環の研究に取り組んできたが、前職の総合地球環境学研究所で、環境変化と人々の環境意識の関係についての研究プロジェクトを企画・実施したことから、社会科学的な環境研究にも興味を持つようになった。



上野 正博(うえの まさひろ)

京都大学フィールド科学教育研究センター
助教

1951年河内生まれの湘南ボーイ。センター発足時から現職。専門は水産海洋学。日本海沿岸域の環境と生物との関わりについてあれこれと調べているが、要素主義に陥った近代科学を否定し、日本海とそこに暮らす生き物(人間を含む)を丸ごと理解しようとして、泥沼にはまっている。



椿 宜高(つばき よしたか)

京都大学生態学研究センター
教授

1948年福岡県生まれ。九州大学大学院理学研究科博士課程中退。九州大学、名古屋大学、国立環境研究所を経て06年より現職。専門は動物生態学、行動生態学、保全生態学。おもに昆虫について、繁殖行動、生活史戦略に関する研究を行っている。最近昆虫の生息場所選択と体温調節の関係に興味をいだき、気候変動の影響を探ろうとしている。



谷内 茂雄(やち しげお)

京都大学生態学研究センター
准教授

1962年金沢市生まれ。08年より現職。専門は数理生態学。2001年から2006年まで総合地球環境学研究所に所属し、琵琶湖-淀川水系で流域ガバナンスを主題とした分野横断型のプロジェクトに取り組んだ。現在はその経験をもとに、生物多様性・生態系の機能解明とその保全理論の研究をおこなっている。



奥田 昇(おくだ のぼる)

京都大学生態学研究センター
准教授

1969年山梨県生まれ。05年より現職。専門は魚類の生態学。現在は琵琶湖を対象として、さまざまな人間活動が生態系に与える影響を解析している。特に、琵琶湖集水域の生息地のつながりが在来魚保全に与える効果に注目している。



天野 礼子(あまの れいこ)

アウトドアライター

1953年京都市生まれ。中学、高校、大学を同志社に学ぶ。88年、文学の師・開高健とともに「川の国」のダムに警鐘を鳴らす国民運動を立ち上げ、育てた。近著は『21世紀を森林(もり)の時代に』。04年から高知県で、森里海のつながりを取り戻す社会実験を展開中。有機農業への助力も開始した。

第5回 時計台対話集会

森里海のつながりを生物多様性から考える

<プログラム>

総合司会 柴田 昌三 (京都大学フィールド科学教育研究センター副センター長)

13:30 開会挨拶 白山 義久 (京都大学フィールド科学教育研究センター長)

13:35 総長挨拶 尾池 和夫 (京都大学総長)

■ 第一部 講演

13:40 講演 1 「原生林も里山も地域の宝」
只木 良也 (名古屋大学名誉教授)

14:10 講演 2 「水と砂の流れと生物多様性」
向井 宏 (北海道大学名誉教授)

14:40 休憩

■ 第二部 パネルディスカッション

15:10 コーディネーター
益田 玲爾 (京都大学フィールド科学教育研究センター)

パネラー

吉岡 崇仁 (京都大学フィールド科学教育研究センター)

上野 正博 (京都大学フィールド科学教育研究センター)

椿 宜高 (京都大学生態学研究センター)

谷内 茂雄 (京都大学生態学研究センター)

奥田 昇 (京都大学生態学研究センター)

■ 第三部 会場との対話

16:10 司会 天野 礼子 (アウトドアライター)

16:55 閉会挨拶 高林 純示 (京都大学生態学研究センター長)

17:00 閉会